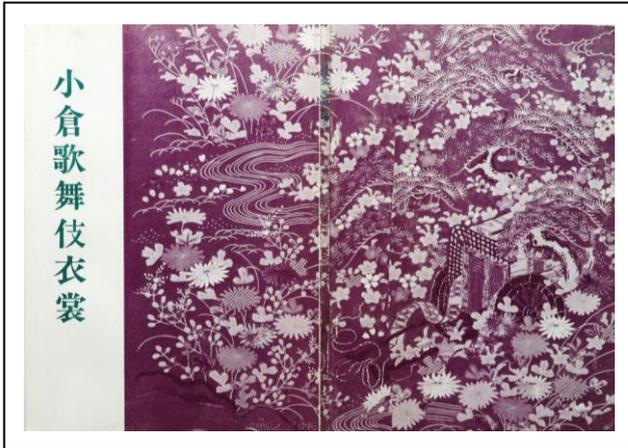


かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第36号 (令和3年4月)

あゆむ「今日もまたお城なの？」
 ふみお「そう思ったんだけど、今日は、お家。」
 あゆむ「えっ！ どこにも出かけないの？」
 ミドリ「今日は、家の本で調べるんですって。」
 あゆむ「つまらないな・・・。」
 ふみお「コロナのことはまだまだ油断はできないからね。」
 ミドリ「でも、歌舞伎の衣装とか小道具が見られるんだって、この本で。」
 あゆむ「へえ、この本が何なの？」



ふみお「“小倉歌舞伎衣裳”。上山城の発行だ。つまり、この本に載っているものがお城にあるというわけだ。」
 文じい「前に展示をしていた時、それを見せてもらったことがあったが、いつもは収蔵庫に収められている。」
 あゆむ「小倉というと、スキーで蔵王に向かう途中の地区だよな。」
 ミドリ「“かぶき”というと、東京の歌舞伎座とかでしょう？ それで、何で上山なの？」
 文じい「実は、村では昔から芝居、つまり演劇が催されていた。」
 ミドリ「あら、素敵ね。それって、どこからか来てもらうの？」

小倉歌舞伎

い し ょ う こ ど う ぐ い っ し き

衣装・小道具一式

文じい「ふむ、中央の歌舞伎劇団が各地を廻っていたようなんじゃない。」
 ふみお「でも、“小倉歌舞伎”というけれど・・・？」
 文じい「ふむ、この小倉の村でも芝居をするようになったということじゃな。」
 ミドリ「小倉の人たちが習ったということなの？」
 文じい「ま、そういうことが考えられるの。」
 あゆむ「まず、中を見てみようよ。」
 ミドリ「うわあ、すごいわ！」
 ふみお「“紫縮緬地松桜秋草御所車模様小袖”。」



ミドリ「あら、この衣装の模様はこの本の表紙になっているわね。」
 あゆむ「あ、本当だ！」

ミドリ 「こうしてみるとすごく細かな模様なのね。下の中央に御所車。その周りに松と桜の春草、そして、秋の草花。華やかだわ。」

ふみお 「縮緬とか、小袖というのは？」

文じい 「縮緬は布面に細かなしわをつける絹織物。小袖は、袖口を狭くし、えりが垂れ下がる長着じゃな。」

ミドリ 「それにしても豪華な衣装が多いわね。」

文じい 「江戸時代に位の高い人の奥方様などが、実際に着たものだろうということらしい。」

ふみお 「なるほど。次は、“薄紫縮緬地文字入桐立木手模様小袖”。」



あゆむ 「かっこいいね！ 字が入っている。」

ふみお 「“舞鶴衣風”。それから、木が下から曲がりくねって上に広がって伸びているね。」

ミドリ 「おもしろいデザインだわ。」

文じい 「ふむ、この本に解説が載っているが、“立木手模様”で、インドの“生命の樹”模様から影響を受けたものらしい。」

あゆむ 「ふーん、こんな着物を着ていったいどんな芝居をやっていたんだろうな。」

文じい 「これを着たその役者が、生命の樹となる感じなのじゃろうな。」

ミドリ 「実際にお芝居を見てみたかったわね。」

あゆむ 「ほかにもいろんな服や刀もあるぞ！」

文じい 「“小道具一式”が、衣装と共に指定文化財になった。」

ミドリ 「それにしてもこのようなすばらしいものが、いつ、どのようにしてつくられたのかしら。」

ふみお 「本には、上山の地芝居(歌舞伎)ということの説明が載っている。」

あゆむ 「地芝居？」

ふみお 「地元の人々が役者になって上演される素人芝居のことで、村芝居とか村歌舞伎、草芝居などと言われたらしい。神社の境内で上演され、神様に奉納したということのようだ。」

ミドリ 「あら、ここに“衣装と台本”とあるわ。衣装は数十点。台本は十数冊あったんだって。」

ふみお 「あ、それに俳優供養碑とか、俳優師恩碑という説明もある。」

あゆむ 「え、それどこにあるの？」

あゆむ 「小倉の観音堂入り口の左側だっ。それともう一つは塩坪だっ。」

あゆむ 「おお、そこに行ってみようよ。」

文じい 「塩坪の方は、引っ越しなどの時に不明になったらしいが、小倉にはある。以前に撮っておいた写真があるので、それを見せよう。」



ふみお 「右に、藤間文三郎。左は、山下莊之助。」

文じい 「莊之助は本名は庄之助と書き、小倉の工藤家の先祖で、衣装や台本はこの工藤家で保管していた。それらから、小倉歌舞伎は江戸時代の享保20年(1735)以降のことと考えられるということじゃ。」

ふみお 「酒田の“黒森歌舞伎”などは有名だけど、上山にも、高松、檜下、宮脇などにあつたという記録があるそうだ。」

ミドリ 「上山にもすごい文化があつたのね。もっと調べてみたいわ」